

## タシケントの『乞食』に関する人類学的研究

— ポスト・ソビエト期における再イスラーム化と女性 —

和 崎 聖 日

報告者は、ウズベキスタンの首都タシケントにおいて、2002年3月から2003年10月までの期間の内、約7ヶ月間のフィールド調査で得られた資料に基づき、「タシケントの『乞食』に関する人類学的研究—ポスト・ソビエト期における再イスラーム化と女性—」と題する発表を行った。まず、本発表の内容の前に、「乞食」に相当する現地での概念に関して、簡単に補足しておきたい。「乞食」に相当するウズベク語としては、ガドイ gadoy (食べ物や金銭を乞う人)、ティランチ tilanchi (欲する人)などの語が主に使われており、「乞食」の概念は、現地の実態として、ひとまずは存在するものとみなしてよいと考える。また、デルビーシュは、時に「乞食」としてみなされていたものの、概して「乞食」とは区別されるため、本報告では、彼らを「乞食」とは区別して扱うこととする。そして、乞食の語を括弧つきで表記する理由は、上記のような「乞食」に相当する現地語が基本的に侮蔑的な意味合いを含む他称であるからである。さて、本発表では、「乞食」の生活世界を具体的に記述し、彼／彼女ら自身の体験に即して論じることによって、ソ連解体後十年以上が経つ現在のウズベキスタンの社会状況を、特に宗教と女性の観点から、理解することを目的とした。そして同時に、マクロ（経済と宗教）とミクロ（「乞食」の生活とライフ・ストーリー）を結び付け、社会と個人をより密接に連動したものとして捉えようと試みた。それでは、なぜ「乞食」を対象とすることが、社会分析を行う上でより有効であるといえるのか。その主な理由としては、ペレストロイカ及びソ連解体後、ウズベキスタンにおいて、資本と宗教が解放されたが、「乞食」がその接点に位置していることが挙げられる。その際、「乞食」を両者の接点として位置づける具体的な根拠は、「乞食」は、概して、ペレストロイカ及びソ連解体に起因する社会変容に適応できなかった経済的な「敗者」であるが、同時にソ連解体前後から再生した宗教によって、自らの正当性を補っているからである。したがって、「乞食」を対象とすることは、ソ連解体後のウズベキスタンの社会状況を分析する上で、より有効であると考えられる。タシケン

トでは、これまで「乞食」といえば、中央アジアの「ジプシー」といわれるロラと、第二次世界大戦とアフガニスタン戦争という二度の戦争後の傷痍軍人だけであつたとしばしばいわれる。しかし、現在はウズベク人やロシア人など多様な民族の人々も数多く物乞いをするに至っているが実状である。中でも、民族を問わず、障害者、子供、女性、高齢者など、いわゆる「社会的弱者」の割合は非常に高くなっていた。ソ連解体後の「乞食」の増加の背景としては、概して、ソ連時代に形成された政治／経済構造の破綻による経済の悪化とそれに続く雇用の減退、年金など社会保障制度の衰退、そして社会主義政策のもとでは原則として禁止されていた物乞い行為のイデオロギー転換による許容が挙げられる。特に、タシケントの「乞食」の中でもウズベク人に限定すれば、その大半は、ソ連解体後から長期的に住み込むようになった都市への移住者か、地方から物乞いのために定期的かつ一時的に来訪する地方出身者であつた。また、男性の「乞食」には60代以上の年齢層の割合が高く、女性の「乞食」は20-30代の層の割合が高いことは、物乞いを始めるに至る背景のジェンダーによる相違を示していた。例えば、女性の「乞食」の多くは、婚前の処女の喪失や離婚など性や結婚に関する家父長制的な規範からの逸脱によって、家族の不名誉や恥、姉妹の結婚への影響などを理由に、地元の共同体を追われた人々であつた。いずれにしても、人々は、現金が集中し匿名性の高いタシケントで、物乞いを生活の糧とすることにより、時に「一般市民」と大差のないレベルの生活を営むことを可能としていた。一方、そうした物乞いによる生活を支える思想的な背景としては、ソ連解体前後からの再イスラーム化に伴うサダカという宗教規範の浸透が重要であると思われる。サダカは、概して、任意の喜捨などの慈善行為を指すが、ウズベキスタンにおいては「乞食」への施しを指すことが多い。そして、金曜礼拝でのイマームによる説教や説教を収録したカセット・テープでは、サダカの意義が強調され、その実践が推奨されていた。また、そうしたサダカの意義は、実際に施しをする人々の動機付けになるとともに、物乞いの際の根拠ともなっており、両者は相互補完的な関係を形成していることが分かった。つまり、本発表では、「乞食」の事例を導入することにより、まず、道德規範のあり方に関して、主にジェンダーによる相違を明らかにした。そして、同様に、タシケントでのサダカという宗教規範の浸透とその実践が、特に地方の共同体における道德規範からの逸脱による排除や、ソ連解体前後からの経済の悪化および社会保障制度の衰退に主に起因する問題を、部分的にせよ、補う機能を果たしていることを明らかにした。

なお、本テーマについては、本報告者執筆の『中央ユーラシアを知る事典』（平凡社、2005年）「乞食」項目も参照されたい。

（京都大学大学院修士課程）